

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 96 号

2026 年 3 月

日本薬史学会 2026 年度の主要行事のご案内

編集委員長 齋藤充生

来年度の日本薬史学会の日程について 1 月 13 日の常任理事会時点の情報をお知らせいたします。コロナの状況等により日程変更の可能性がありますので、最新情報・詳細は学会 HP でご確認ください。多数の会員のご参加をお待ち申し上げます。

1. 日本薬史学会総会・公開講演会の開催日について

開催日：2026 年 4 月 18 日(土) (予定)

会 場：東京大学大学院薬学系総合研究棟 2 階講堂

- 1) 12:30-13:30 理事・評議員会
- 2) 14:00-15:20 総会
- 3) 15:30-17:40 公開講演会

○青木歳幸先生

(佐賀大学特命教授、日本医史学会理事、元日本洋学史学会会長)

「初代司薬局長永松東海の事績」

○川西徹先生

(国立医薬品食品衛生研究所・名誉所長)

「レギュラトリーサイエンス事始め

—東京司薬場馬喰町仮庁舎について— (仮)」

費用：公開講演会(非会員も参加できます)は資料代 500 円を当日お支払いください。懇親会の予定はありません。

日本薬剤師研修センター：1 単位(予定)

2. 柴田フォーラムの開催日について

開催日：2026 年 7 月 12 日(日) (予定)

会 場：日本薬科大学お茶の水キャンパス(予定)

演 題：未定

3. 日本薬史学会 2025 年会(仙台)の開催日について

日 時：2026 年 9 月 26 日(土)

年会長：佐々木健朗(東北医科薬科大学教授・附属薬用植物園園長)

会 場：東北医科薬科大学小松島キャンパス

詳細は本紙記事をご覧ください。

日本薬史学会 2025 年会(静岡)報告

年会長 桐原正之

日本薬史学会 2025 年会は、2025 年 10 月 4 日(土)、静岡理工科大学静岡駅前キャンパスにおいて開催された。参加者は 100 名を超え、近年の年会としては

盛会となった。薬史研究者のみならず、薬学・医療・関連産業など多様な分野からの参加があり、世代的にも幅広い交流の場となったことが本年会の大きな

特徴である。

一般講演では、口頭発表14題、ポスター発表9題が行われ、化学史、医療史、薬学史、漢方薬史、医薬品開発史など、多岐にわたるテーマについて活発な討論が交わされた。特別講演として、井上宗宣氏(相模中央化学研究所)による「含フッ素医薬品の開発史—毒矢からブロックバスターまで—」、公開講演として佐藤健太郎氏(サイエンスライター)による「世界史を変えた薬」が行われ、いずれも専門性と一般性を兼ね備えた内容として、多くの聴衆の関心を集めた。また、招待講演では鈴木寛彦氏(むつごろう薬局)による「徳川家康公の漢方薬—医薬への関心と造詣—」が行われ、静岡開催ならではの歴史的な文脈と薬史研究の接点が印象深く示された。

同日夕刻には情報交換会(懇親会)が開催され、第五代徳川慶喜家当主・山岸美喜様にもご臨席いただいた。和やかな雰囲気の中で、研究分野や世代を超えた交流が進み、本学会の特徴である自由闊達な議論と人的ネットワークの広がりを改めて実感する機会となった。

翌10月5日(日)には薬史ツアーが実施され、参加者41名が参加した。久能山東照宮、浮月楼(徳川慶喜旧宅)、油山寺、澤野医院記念館など、静岡な



らではの医薬史・文化史に関わる地を巡り、理解を深めた。昼食会場の浮月楼では静岡県副知事・平木省様のご参加もあり、地域と薬史研究との結びつきを象徴する場面となった。史跡・資料を実地に見学することにより、文献研究だけでは得がたい具体的な知見を共有できた点は、本ツアーの大きな成果であった。

本年会は、学術的充実に加え、地域性、歴史性、世代間交流を強く意識した構成となり、日本薬史学会の今後の方向性を示す年会であったといえる。開催にあたりご協力いただいた関係各位ならびにご参加いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

日本薬史学会2026年会のご案内

日本薬史学会2026年会(仙台) 年会長 佐々木健郎

日本薬史学会2026年会の年会長を務めさせていただきます、東北医科薬科大学教授の佐々木健郎でございます。このたび、薬史学会年会を主催する機会を頂き、大変光栄に存じます。2026年会は、仙台市青葉区にある東北医科薬科大学の小松島キャンパスを会場に初めての開催となります。日程は9月26日(土)年会、翌9月27日(日)には、「薬史ツアー」を実施する予定です。本年会では3つの特別講演と

1つの市民公開講座として、特別講演1「塩竈蛮紅華湯(塩釜さふらん湯)の歴史(仮)」、特別講演2・市民公開講座「世界を変えた薬用植物(仮)」、特別講演3・宮城県と東北地方の家伝薬(仮)を行う予定です。また、例年通り口頭発表およびポスター発表を予定しております。多くの会員の皆様からのご発表を心よりお待ちしております。26日(土)の学会終了後には情報交換会を予定しており参加者同士

の交流を深める機会となるよう準備を進めております。年会および情報交換会の具体的な内容、そして発表募集の詳細は追って日本薬史学会のホームページにてご案内いたします。薬史ツアーは現時点での案ですが、仙台市を拠点に宮城県北部に現存する歴史的な意義を持つ名所を訪ね、薬史に触れる貴重な体験を提供する予定です。現時点では、仙台駅発一登米市(鈴彦商店、登米懐古館、くすりと度量衡のアンティーク資料館等見学—松島(瑞巖寺)—仙台(瑞鳳殿等)を巡るバスツアーを予定しています。こちらも参加申込みの詳細は、今後日本薬史学会のホームページにてご案内いたします。最新情報を随時更新いたしますのでご確認ください。9月の仙台は年間で最も観光客やイベントの多い季節になります。このこともあり、ご参加の皆様にホテル宿泊等でご不便をおかけしないように、既に仙台駅前に9月25日(金)と9月26日(土)のホテルを旅行代理店を通して手配済みです。2026年1月の段階でもご自身で手配されますと既に多くが予約済みで通常より高額な宿泊費となってしまう状況のようですが、年会で手配済みのホテルでは通常とほとんど変わらない価格で宿泊が可能となりますので是非ご利用いただければと存じます。この宿泊のご案内も日本薬史学会のホームページにてご案内いたしますので是非ご利用ください。仙台と宮城県北部の豊かな自然と歴史の中で、薬史研究の新たな展開について語り合える機会となることを願っております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本薬史学会主催 日本薬史学会2026年会(仙台)

◇学会 開催年月日 令和8年9月26日(土)
会 場：東北医科薬科大学小松島キャンパス
アクセス：東北医科薬科大学 HP をご参照ください。
<https://www.tohoku-mpu.ac.jp/>

◇薬史ツアー 開催年月日 令和8年9月27日(日)
仙台駅発一登米市(鈴彦商店、登米懐古館、くすりと度量衡のアンティーク資料館等見学—松島(瑞巖寺)—仙台(瑞鳳殿等)を予定

日本薬史学会2026年会(仙台) 実行委員会メンバー及び事務局

- ・ 年会長
佐々木健郎(東北医科薬科大学 教授・附属薬用植物園園長)
- ・ 実行委員
村田敏拓(東北医科薬科大学 准教授)
小林匡子(東北医科薬科大学 准教授)
船山信次(日本薬科大学 客員教授・日本薬史学会 会長)
江戸清人(仙台医健・スポーツ専門学校 非常勤講師)
八巻春男(日本薬用植物友の会 会長)
我妻邦夫(日本薬用植物友の会 幹事・事務局担当兼任)
村井ユリ子(東北医科薬科大学 教授・薬学部長)
- ・ 大会事務局
東北医科薬科大学・薬学部生薬学教室内
日本薬史学会2026年会(仙台)事務局
〒981-8558 仙台市青葉区小松島4-4-1
TEL 022-727-0221 FAX 022-727-0220

2025年度六史学会合同12月例会報告

編集委員長 齋藤充生

今年度も二松学舎大学九段キャンパスにて、2025年12月20日(土) 14:00～17:30に講演(ハイブリッド開催)、引き続き同じ建物の13階にて19:30まで懇親会が盛会のうち、行われました。

会場は夏目漱石も通った漢学塾二松学舎(二松学舎大学の前身)の故地に隣接し、向いはイタリア文

化会館という、歴史と文化を感じさせるものでした。発表は下記のように各学会35分の持ち時間でしたが、各学会とも大変密度が濃く、薬史学会員からの質疑も多くありました。聖マリアンナ医科大学では、50周年を機に長崎シーボルト資料館への貸与資料が明らかになり、医学情報センターに医史学研究室を設置したとの紹介がありました。図書館や資料館

を持つ薬科大学でも参考になる試みと感じました。また、年会案内も名刺大のカードで、配布方法の工夫を感じました。シーボルトに始まり、シーボルトに終わる、充実した午後を過ごすことができました。

プログラム <https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/event/rokushi/>

- 14:00-14:35：日本医史学会：松田 隆秀(聖マリアンナ医科大学 総合診療内科 教授)：聖マリアンナ医科大学医史学研究室のご紹介
- 14:35-15:10：日本薬史学会：山本 卓司((株)マトリクソーム 代表取締役社長)：コラーゲン医療応用の研究開発史

- 15:10-15:45：日本獣医史学会：前田 健(国立感染症研究所 獣医科学部)：SFTSを振り返る
- 16:05-16:40：日本歯科医史学会：石井 拓男(学校法人 東京歯科大学 監事)：歯科衛生士の浸潤麻酔
- 16:40-17:15：日本看護歴史学会：船木 沙織(天使大学 看護栄養学看護学科)：原爆医療法制定後の原爆傷害調査委員会(ABCC)医療職の活動—広島市・長崎市との協力活動に焦点を当てて—
- 17:15-17:50：洋学史学会：堅田 智子(関西学院大学 教育学部 准教授)：「シーボルト先生其生涯及功業」をめぐる呉秀三とシーボルト家

六史学会発表

コラーゲン医療応用の研究開発史

株式会社マトリクソーム／北海道大学歯学研究院 山本卓司

令和7(2025)年12月20日(土)に二松学舎大学九段キャンパスで、六史学会(合同例会)が開催された。日本薬史学会からは、「コラーゲン医療応用の研究開発史」と題して、人類が、コラーゲン分解物である膠を生薬として利用したことから始まり、膠を精製したゼラチンの利用を経て、コラーゲンそのものを利用するに至るまでの研究開発の歴史について発表した。本稿では、発表の事後抄録として、講演内容を概説する。

コラーゲンは、皮膚、骨、腱、血管などの結合組織を構成する主要タンパク質であり、人類は紀元前の時代から、動物の皮や骨を生活や医療に利用してきた。皮を鞣して革とし、骨や皮から膠(にかわ)を得るといった営みは、古代エジプトや古代中国の時代から行われてきたことが記録されている。これらは、コラーゲンというタンパク質あるいは分子を理解した上での利用方法では無かったが、結果としてコラーゲン由来材料を活用していた好例である。

近代に入り、皮や骨の主成分が「コラーゲン」と呼ばれるタンパク質であることが明らかになると、コラーゲン分子に関する研究が急速に進展した。1940年代に電子顕微鏡を用いた線維構造の研究が行わ

れ、1950年代には、コラーゲン分子のアミノ酸配列の研究と合わせて、三重らせん構造モデルが提唱された(Ramachandran, 1954)。その後、(Gly-X-Y)という3つのアミノ酸配列(XにはPro、YにはHypが頻出する)の繰り返しを持つことが、三重らせん構造を形成するための重要な要素であることが解明された。さらに、この繰り返し配列によって形成される線維構造が、生体組織の力学的特性を説明する基盤であることも明らかとなった。

一方で、可溶性技術が発見されるまでのコラーゲンは、皮革以外の用途で三重らせん構造を保持したままのコラーゲンを産業利用することは困難であった。そのため、医療や製剤分野では、加熱または酸・アルカリ処理によって部分的に変性させたゼラチンが主に用いられてきた。ゼラチンは、ゾル・ゲル転移性、皮膜形成能、生体内での生分解性といった性質を有しており、このような成型の自由度と高生体親和性によって、医薬品製剤に広く利用されてきた。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ゼラチンはワクチンや注射製剤の安定化剤として用いられるようになり、タンパク質製剤を保護する材料として医療に不可欠な存在となった。また、ゼラチンカプセ

ルの発明と量産技術の確立により、医薬品の剤形は大きく進化した。ハードカプセルおよびソフトカプセルはいずれも、常温下での形状安定性と、生体内での易溶解性というゼラチンの物性を巧みに利用した薬剤封入容器かつ徐放剤であり、現在もなお医薬品製剤の中心的技術として利用されている。

1960年には、不溶性と認識されていたコラーゲンを、タンパク質分解酵素を用いることで可溶化する技術が開発され、3重らせん構造を保持したままのコラーゲン分子を取り扱うことが可能となった(西原, 1960)。この発見によって、ゼラチンとは異なる性質を持つ「ネイティブなコラーゲン」を医療材料として利用することが可能となった。このネイティブなコラーゲンが溶解したコラーゲン溶液は、温度と pH を生理条件にすることで生体内のコラーゲンに似た線維構造を再構築する能力や、細胞接着の足場としての機能を有しており、単なる充填材や被覆材とは異なる生物学的役割を果たすことが明らかとなった。さらに、コラーゲン分子の線維に接着した細胞は、増殖や分化、シグナル伝達において、他の足場剤に接着した細胞とは異なる応答を示すことが明らかになり、コラーゲンは「構造材料」から「生体情報材料」へと位置づけを変えていった。この理解は、創傷治療、歯科・整形外科領域、さらには再生医療へと応用範囲を広げる原動力となった。コラーゲンを材料とする製品として、これまでに、創傷被覆材、止血材、歯周組織再生材、骨補填材、神経再生用ガイドチューブなど、多様な医療機器が上市されてきた。これらはいずれも、歴史的に培われてきたコラーゲン抽出技術、ゼラチン精製技術、さらには高分子加工技術の上に成り立っている。これ

らの製品開発の概要については、薬史学会雑誌の原著論文としてまとめられているので、参照していただきたい(荒井, 薬史学会雑誌, 2025)。

このような、コラーゲンを中心とした細胞外マトリックスタンパク質の研究は、タンパク質分析機器の進化と遺伝子工学の発展をテコに、大きく進展した研究分野である。近年注目されている再生医療応用においては、細胞外マトリックスタンパク質の一種であるラミニンタンパク質が再生医療の研究に大きく貢献しており、細胞生物学の研究分野においても、再注目されている重要なタンパク質群となっている。

以上、講演においては、コラーゲンとゼラチンを区別しながら、それぞれがどのような歴史的背景のもとで医療に取り入れられてきたのかを概観した。今後の再生医療等製品への利用においては、これまでに蓄積された安全性評価や品質管理の知見をどのように継承して、新たな規制枠組みに調和させていくかが重要な課題となるであろう。本講演が、コラーゲン医療応用の研究開発の歴史と現在の立ち位置を知り、これからの医療応用の可能性を感じる機会となれば幸いであると考えている。



西欧薬学史補講(6)

辰野美紀

はじめに

ディオスコリデスの薬物誌研究については、故大槻真一郎(1926-2016)が明治薬科大学に赴任後の40代後半から80代にかけて、専門を哲学研究から

医学・薬学史研究に変更し、特に、全て、その原書、ギリシャ語原典からの翻訳研究会(例えば、ヒポクラテス研究、ディオスコリデス研究、パラケルスス研究など)を組織し、多くの翻訳や著作を世に問う

た。また、多くの古典資料の収集に尽力し、明治薬科大学内に西洋古典医薬関係論文資料館(ディオスコリデスの第1巻から第5巻までの復刻版(Wien写本)なども収集)を設立した。その成果の1つとして、2021年の「西洋本草学の世界—ディオスコリデスからルネサンスへ」¹⁾がある。しかし、ディオスコリデスの薬物誌のギリシャ語原典翻訳は未完に終わった。2022年、故 大槻真一郎名誉教授の遺志を継いで、明治薬科大学の岸本良彦の手によって、八坂書房から全訳翻訳が出版された²⁾。岸本教授の著作では、原著にある植物画は、全く掲載していない。大槻先生と、岸本先生の出版の違いは、植物本草学の背景となっているギリシャの文化、文明を支えている思想、宇宙観、さらにはギリシャ神話、伝承などに対する理解の違いと評価して良いだろう。豊富な採色植物画を掲載するかどうかは、ギリシャ医薬の治療上の効果とその裏にある豊かな世界を認めるか、迷信として削除するかという大きな医学史・薬学史上の問題をも含んでいるとも考えられる。ただ、出版上の問題かも知れないが。

1. Pedanius Dioscorides の生涯

ディオスコリデスの生年は、大槻、岸本両氏の著作によると、『博物誌』を著したプリニウスと同時代に生きていたと推定できるので、クラウディア帝およびネロ帝(41～67)の治世と思われる。出身は小アジアのキリキアのアナザルがディオスコリデスの



文献1)

▶ニカンドロス「テリアカ」
 οζισθιον (*Anchusa officinalis*,
 ウマノシタグサ属の植物) についての記述
 9-10世紀、パリ、国立図書館蔵
 Ms. Supplément grec 247, fol. 16

父親の住んでいた場所なので、彼の出身地も同じと推定されるらしい。医師としての教育は、当時の医学教育の中心地であったアレキサンドリア、ラオディケイア、キリキアのタルソス(エペソスと並ぶ)など数か所で研鑽を重ねたであろうと、岸本は考えるという。また、「タルソスでは、植物を主とする薬物の研究が行われ、優れた教師も集まっていた。その中で尊敬を集めた初期の教師の一人が、」ディオスコリデスが『薬物誌』の「序の初めに見えるアレイオスであろう。」と分析している。「アレイオスは、アスクレアデス派(方法学派)の信奏者で、『薬物集成』という著作があったとされる。」とも記している。

ディオスコリデスは、医師、また軍医として多くの土地を巡回していたことから、各地の医療の見聞を広めたともいう。大槻は、彼の薬物誌の特徴は、実地の治療(実践的)にたけていることで、植物学的な分類学などについてはあまり専門的な評価はできないと評価している。

なお、ディオスコリデスの死亡年は、不明という。

2. ディオスコリデスの著作

ディオスコリデスの著作は、『薬物誌』のほかに全2巻の『単純薬論』がある。その第1巻は、外用薬と内服薬を掲載し、頭から下部に向かって順番に記載しているという(Werkonの調査によると、書かれたのは1世紀半ばであるが、すでに失われている。現存しているのは原典の12世紀から13世紀の写本である)。

3. ディオスコリデスの(De Materia Medica『薬物誌』)にある植物薬、植物生薬、植物本草の例 <薬学史入門の p.39参照>

3-a. 第1巻から第5巻の掲載物

第1巻：香料、香油、軟膏、樹脂や樹皮を産する草木、果物など。

第2巻：動物、その乳・蜜・脂肪、食用の穀物、食用野菜など。

第3巻：根を用いる薬草。

第4巻：液汁や種子類の薬草。

第5巻：酒精類、鉱物など。

今回は岸本の訳注を参考に代表的な植物薬を示したい。

引用文献

- 1) 大槻 真一郎 澤元 互(編) 西洋本草学の世界—ディオスコリデスからルネサンスへ, 2021年, 八坂書房 P.16
- 2) 岸本 良彦(訳注)ディオスコリデス, 薬物誌, 2022年, 八坂書房

中部支部だより

令和7年度 日本薬史学会中部支部例会開催について

中部支部 事務局 内藤記念くすり博物館

今年度の例会を下記の通り開催しました。

日 時：令和8年2月21日(土曜日)午後1時30分
から午後5時

場 所：ウインクあいち 11階 1106

アクセス：名古屋駅桜通り口から5分、ミッドランドスクエアビルの裏(東)【HP参照】

講演会：三名からの講演

演題①：『インドアーユル・ヴェーダ処方集(*The Ayurvedic Formulary of India*)』におけるカルヤーナカグリタの調合」
○夏目葉子先生

演題②：「丹波修治の出生と丹波家の家系」

○河村典久先生

演題③：「鎌倉・室町の医療とくすり」

○稲垣裕美先生

中部支部長：河村典久

事務局：内藤記念くすり博物館

〒501-6195

岐阜県各務原市川島竹早町1

内藤記念くすり博物館内

電話：0586-89-2101

今年も昨年と同じ名古屋駅近くの会場でした。連休、そして薬剤師国家試験初日でしたが、12名(参加者名簿より)が集まり、演題①の生薬や再現処方品も回覧され、終始活発な質疑が行われました。事務局の交代がありました。今後も変わらぬ支部活動の継続を願っています。(齋藤充生)

東京大学薬学図書館薬史学文庫の展示は、本会評議員飯野洋一先生のご尽力で数次に渡り開催され、薬史学雑誌へのご寄稿のほか、薬史レターでも取り上げております。この度、「医学図書館」誌のコラム「オン・ザ・スポット」に資料展示見学の報告が掲載されましたので、お知らせいたします。

東京大学薬学図書館で2022年度から2024年度に開催された資料展示会見学 報告. 菅修一. 医学図書館. 2025:72(1):32-36.

https://doi.org/10.7142/igakutoshokan.72.1_32

東京大学薬学図書館2024年度第2回展示「薬史学文庫の設置とその意義 ～日本薬史学会創立70周年を記念して～」見学報告. 菅修一. 医学図書館. 2025:72(3):176-179.

https://doi.org/10.7142/igakutoshokan.72.3_176

薬史の輪を広げましょう！

財務・会員管理委員長 横山亮一

日本薬史学会は、幅広い薬に関する歴史を研究することを目的としております。そのためには、薬の歴史に興味・関心を寄せる仲間の輪を広げることが、継続した興味・関心を高め研究の輪を広げることになると思っております。

会員の皆さまのお仲間で、薬に関する事柄にご興味を持ちそうだなと思う方が、おられましたら、是非、日本薬史学会をご紹介ください(インターネットで、「薬史学会」とググれば、活動内容、学会誌等を見ることができます)。

薬に関する事柄にご興味をお持ちであれば、学生から高齢の方まで何方でも入会できます。会員には薬を軸とし幅広い事柄に関心を持つ方がおられ、毎年1回の年会や年2回刊行の学会誌(薬史学雑誌)

に幅広い発表があり、発表を聞いているだけ、論文を読んでいるだけでも知的興味が高まり、楽しいです。

薬の歴史に関心をお持ちの、現在研究や仕事に携わっておられるご同僚・ご友人はもとより、研究や仕事を終えられた後も知的関心を持ち続けておられるお仲間がいらっしゃいましたら、日本薬史学会をご紹介ください。お願い申し上げます。

入会申込書は日本薬史学会のホームページ(<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/>)にあります

会員の輪が広がるのが、日本薬史学会の活動が盛り上がり、財政運営が安定し、学会の継続につながります。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

海外の薬史学会の今(16) イタリア

国際委員会 宮崎啓一

2024年はイタリア薬史学会にとって数多くの活動が行われた年であった。

5/10～12までPesaroで開催された第73回年会はイタリア薬史学会評議会のメンバーの多大な尽力と、イタリア文化首都2024の主催者代表であるDaniele Vimini氏の支援により成功裡に終えることができた。特にUrbino大学学長、FOFI会長、農業協同組合会長、ISHP会長らが出席した。本年会では例年どおり様々な賞および盾が授与され、学会発表および独自のイベントが催された。

また2025年カレンダーの特別号にはイタリアの歴史ある薬局13軒の概況および簡単な歴史解説と写真が掲載された。

社会活動や会員活動も精力的になされ、フィレンツェではAccademia ColombariaにおいてGiovanni Cipriani氏は、「フィレンツェ大公薬局」で知られるGiovanni Piccardi氏の研究成果を発表した。

Bresciaでは2/24に市民病院薬局500周年を記念する会合が開催された。

3/3～6/30まで、Ernesto RivaとCarla Camanaは、展示会『何世紀にもわたるハーブによる癒しと滋養』を開催し、薬用および料理用ハーブの歴史的用途を探求し、伝統的な治療法や日常生活におけるハーブの役割に焦点をあてた。

イタリア薬史学会は今後の取組みとして、薬史学分野における歴史研究と市民の関与を促進することを目的としていくと公表している。

ここで、イタリアを日本と比較すると国土面積約4/5、人口約1/2、薬剤師数約7/10であり、日本よりも規模は小さいが、古代ギリシア・ローマの歴史を起源とするイタリアの薬史学にはポテンシャルの大きさが感じられる。アグレッシブなイタリア薬史学会をモデルにすることは、日本薬史学会に資するものがあると筆者は常々考えている。

アメリカ薬剤師会日本使節団(1947年)の勧告について

日本薬史学会 *The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)*. 西谷篤彦

この度第60回アメリカヘルスシステム薬剤師会(American Health-System Pharmacists (以下 ASHP) の Midyear Meeting 2025、December 7-10 に参加し、ASHP の最高経営責任者(CEO)を14年間勤められ2026年1月31日で引退する Dr. Paul W. Abramowitz、出版部 Dr. Daniel J. Cobough, Dr. Michael Garbay各氏のご助力により、1949年来日したアメリカ薬剤師会日本使節団の勧告についてのオリジナル文献を入手したので紹介します。

アメリカ薬剤師会(American Pharmaceutical Association, 以下 APhA)日本使節団は GHQ/SCAP (連合国軍最高司令官)ダグラス マッカーサー元帥(Douglas MacArthur, 以下マッカーサー元帥)に日本の薬学教育、薬剤師の国家試験などについて報告後、米国へ帰国しました。

APhA会長 グレン・L・ジェンキンス(Glenn L Jenkins, 以下 ジェンキンス会長)氏率いる使節団は1949年7月1日に東京に到着し、4週間にわたり日本各地を精力的に視察する旅行を開始しました。

日本滞在中、使節団は日本薬剤師会年次総会および都道府県薬剤師会の会合に出席しました。日本の薬学部および医学部の施設を視察し、カリキュラムの改善について各校の教員と協議しました。使節団はまた、日本の医薬品製造工場、薬局、病院薬局など数多くの重要施設を訪問しました。

使節団は滞在中、日本の薬剤師や関係者から温かく迎えられました。日本薬剤師会の刈米達夫会長からは、次のようなお礼の挨拶がたびたびおられました。

「日本薬剤師会設立以来、APhA の代表の方々に当協会を訪問していただくことを念願しておりました。この度、7月1日にジェンキンス会長をはじめとする他4名の代表の方々が当協会を訪問されることを大変嬉しく思います。」

「アメリカ使節団には、薬剤師教育施設や業界の状況を綿密に視察していただき、今後の薬学および産業の発展に役立つ提言をいただければ幸いです。」
「アメリカ使節団の訪問によって、私たちが導かれ、人々の尊敬を集める薬剤師となることができれば、この上ない喜びです。」

ジェンキンス会長は東京到着後、日本の薬剤師たちに次のように挨拶しました。

「日本の薬剤師の皆様へ。皆様にご挨拶申し上げます。皆様の教育の向上と専門職としての進歩を心よりお祈り申し上げます。皆様には医薬品の流通に関する実質的な独占権が与えられ、医師には診断と処方という本来の職務が委ねられるべきです。皆様のより偉大で力強い薬剤師職の確立が成功することを心よりお祈り申し上げます。」

訪日を記念して7月10日から20日まで「日本薬局週間」が開催され、使節団はこの機会を記念し、薬局週間中、日本中の薬局の窓に使節団歓迎のポスターが掲示されるという更なる栄誉を受けました。

バーデュ大学薬学部長兼 APhA会長のジェンキンス氏に加え、使節団には、デューク大学薬学部長のヒュー・C・マルドゥーン(Hugh C. Muldoon)博士、カリフォルニア大学薬学部長のトロイ・C・ダニエルズ(Troy C. Daniel)博士、ミシガン大学病院主任薬剤師兼 APhA会報編集長のドン・E・フランケ(Don E. Francke)氏、全米薬剤師会副会長(National Association of Boards of Pharmacy)兼コロンビア特別区薬剤師会会員のロイス・F・フランゾーニ(Royce F. Franzoni)氏が参加しました。

APhA の日本使節団の調査結果と勧告(Findings and Recommendations of APhA's Mission to Japan)の概要は、マッカーサー元帥によって、保健福祉部長クロフォード・F・サムス(Crawford F. Sams)准将を通じて公表されました。

サムス准将の概要を受け取った直後、APhA 事務局長ロバート・P・フィシェリス(Robert P.

Fischelis)は、日本薬剤師会から APhA使節団を高く評価し、今回の訪問と提出された有益な勧告に対し、日本の薬剤師を代表して感謝の意を表する書簡を受け取りました。

サムス准将が要約した調査結果と勧告は以下のとおりです。

1. 薬剤師の資格要件として、従来の3年間のコースに代わり、最低4年間の大学教育を勧められた。一方、薬化学ではなく実務薬学に重点を置き、薬局管理と薬学倫理の研修をより適切に行うことが勧告された。
2. 薬剤師専門職とその全国協会の再編は順調に進展している。医師、歯科医師、医薬品業界の指導者の間には調和が保たれていることが確認された。
3. 1948年7月29日公布の薬事法第197号は、概して優れた基本文書であると評価された。いくつかの若干の修正が勧告された。
4. 医薬品の製造は順調に進んでいることが確認された。多くの品目が日本の需要と同等かそれ以上の供給量となっている。しかしながら、設備の老朽化は危険なレベルに達していた。
5. 経済状況が許せば、基礎研究をさらに長期にわたって行うことが可能である。
6. 小売医薬品の在庫はほぼ全域で良好であった。薬局で処方せんが調剤されるケースは非常に少なく、医療専門家によるサポートが不足していることが見られた。
7. 病院薬局の組織と機能は概ね良好であった。医薬品の標準化が欠如しており、合理的な治療が困難になり、医薬品の価格が高騰していた。
8. 医師が診断と処方を行い、薬剤師が医師の処方せんに基づいて医薬品を貯蔵し調剤投与できるよう、法的小および教育的手段によって医薬分業すべきである。
9. 劇薬および毒薬については処方せんが必要である。
10. 適切な製造技術を実証するための小規模なモデル工場を建設すべきである。
11. 医薬品を貯蔵し調剤投与を行う全ての者は、教



写真は左から右、トロイ・C・ダニエルズ、ロイス・F・フランゾーニ、グレン・L・ジェンキンス、花束贈呈者の服部徳子、ヒュー・C・マルドゥーン、ドン・E・フランケ(参考文献2より引用)

育免許および資質に関して同一の要件を満たし、資格を有する薬剤師のみが主要な役職に任命されるべきである。

12. 日本国内および日本と諸外国間の大学間教員交流を強化する。
13. 人材と教育ニーズを把握し、学校と卒業生の適切な交流を決定するための全国調査を実施する。
14. 大学の授業料依存を軽減するための健全な財政計画を検討する。

サムス准将は次のように述べた。「マッカーサー元帥への報告書は、占領軍が薬事分野で直面している問題と、これまでの成果に対する認識を示している。

使節団は、厳しい経済状況と大きな社会変化にもかかわらず、マッカーサー元帥顧問の指導の下、厚生省が薬学教育、医薬品、生物製剤、器具、その他の資材の製造・流通において達成した進歩を称賛した。」

彼はさらにこう付け加えた。「日本人が病気になると、薬売りから薬剤師、そして医学的知識のある薬剤師、そして最後に医師の順番に行くという日本人の習慣が、国民の大部分の間では一般的であることが使節団によって確認された。

こうした習慣が、質の低い医療と医薬品サービスにつながっている。病院や保健所における医師と薬剤師の具体的な職務と役割の明確化は良好であり、

医療と医薬品サービスもそれに応じて良好であることがわかった。」

なお参考文献1の写真は不鮮明だったので、参考文献2の写真を引用しました。

謝辞：資料提供にご助力頂きましたアメリカヘルシステム薬剤師会(American Health-system Pharmacists, ASHP)CEO の Dr. Paul W. Abramowitz、出版部 Dr. Daniel J. Cobaugh, Dr. Michael Garbay各氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) APhA mission to Japan. J Am Pharm Assoc. 1949;10:496-97, 619 (Regarding the mission of the American Pharmaceutical Association Mission)
- 2) Griffenhagen G, Higbay G, Sonnedecker G, Swann J. 150 Years of Caring (A Pictorial History of the American Pharmaceutical Association) -APhA Publication 2002 P.201
- 3) 天野宏, 百瀬弥寿徳(著). まず薬局へおいでなさい—薬学の巨人 清水藤太郎. 発行 みみずく舎、発売 医学評論社. 2014. p141-144

お知らせ

本会会長船山信次先生の講演録「毒の科学と歴史の魔力と魅力」が学士会会報 No.975:44-55(2025 VI)に掲載されました。目次は以下よりご覧ください。

<https://www.gakushikai.or.jp/magazine/article/bulletin/bulletin-index/>

本会監事(第8代会長)の森本和滋先生が「国立医薬品食品衛生研究所150年史」に「ゲールツ顕彰碑・用賀から殿町へ 10年間の客員研究員として薬史学研究と共に」(p.229-230)を寄稿されました。

なお、国立衛研創立150周年記念シンポジウム関連資料は以下よりご覧いただけます。

<https://www.nihs.go.jp/kanren/koukaikouza/>

<https://www.youtube.com/watch?v=OqiguBHEVVU>

訃報

本会理事(元編集委員)の荒木二夫先生が7月30日に88歳で逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

本会会員で明治薬科大学名誉教授・第11代理事長の奥山徹先生におかれましては、令和7年度春の叙勲にて瑞宝中綬章を授与されましたので、ご報告申し上げますとともに、心からの祝意を表します。

私は現在、薬学部に所属している学生である。大学で薬学の勉強や研究を重ねていく中で、私は次第に薬史学にも興味を持つようになった。そこで、薬の歴史について更に教養を深めるべく、私は奨学金を活用して日本各地を旅し、様々な地域に点在する薬史学にまつわる施設を訪問することにした。

訪問先を考えるにあたって、私は「日本で伝統的に薬業が盛んな地域」に着目した。具体的には、江戸時代から続く「薬の町」である大阪・道修町や、配置売薬業で栄えた奈良県、滋賀県、佐賀県、富山県といった地域が挙げられる。これらに加え、薬の歴史を専門としており、当学会とも縁が深い内藤記念くすり博物館を見学するという方向で、訪問先を決定した。

最終的に、私は一府四県を訪れ、計22ヶ所もの施設を見学させていただいた。本来であれば全ての施設を紹介したいところだが、字数の都合上今回は特に印象に残った場所を記させていただきたい。

まず何よりも強く記憶に残った施設は、内藤記念くすり博物館である。この場所でしか閲覧できない諸展示に沢山の蔵書が保管された図書館、そして付属の広大な薬草園・薬木園は、五感を通して私に薬とその歴史を教えてくれた。

道修町の街並みにも驚いた。通りの両側には

数多くの製薬企業が軒を連ねており、この町で日本の薬産業界は発展したのだということを体感した。

奈良県御所市の三光丸くすり資料館では、薬研や唐臼といった様々な製薬器具に触れることで過去の製薬事情に思いを馳せることができた。

佐賀県鳥栖市の中富記念くすり博物館も興味深い展示が多く、鳥栖市周辺で栄えた田代売薬の歴史を学ぶことができた。

これらの施設の訪問を通して、今まで書籍上でしか知らなかった薬の歴史の世界がより身近に感じられ、教養を大きく広げられた。

今年の3月中旬には、この活動の締めくくりとして「越中富山の薬売り」で有名な富山県を訪問する予定である。これらの旅行を通して得られた教養や体験を、これからの勉強や研究へ活かしていきたい。

最後に、今回の薬史旅行にあたって様々なアドバイスを下さった理事の小清水敏昌先生、内藤記念くすり博物館への訪問の際に私を歓迎して下さい下さった館長の森田宏先生、実際に博物館を案内して下さい下さった評議員の稲垣裕美先生、そして旅行に必要な資金を拠出して下さった一般財団法人・人間塾の皆様にご心より感謝申し上げます。末文とする。ありがとうございました。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 武立 啓子 牧 純

薬史レター 第96号 2026年3月

編集人：齋藤 充生 発行人：船山 信次

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (一財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/>

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください